

早稲田大学 国際教養学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	全問マーク式
試験時間	60分(現代文2問、古文1問)
難易度	昨年並み

〔大問別講評〕

(一) 小説文。出典：夏目漱石『道草』。

(本文字数：約1800字＝昨年より約400字減少。設問数：9＝昨年より2問増加)

小問	難易度	コメント
問一	標準	【漢字】2は易しいが、1、5はやや難しい問題だった。
問二	標準	【空欄補充】空欄cの前後がいずれもマイナス表現であることから判断できる。
問三	やや易	【理由説明】傍線部の前の2文、及び1行目から判断できる。
問四	やや難	【空欄補充】前の段落の「父」の行為を評価する語。微妙な言語感覚が必要。
問五	やや難	【傍線部説明】直前の細君のせりふから。イは「自分の得」が不適切。
問六	易	【傍線部説明】ア、イは論外。ウは「嫌悪」が不適切。
問七	易	【空欄補充】前後の文脈と、慣用表現の意味から判断できる。
問八	易	【傍線部説明】細君の父の賀状の返し方を指している。
問九	標準	【心情把握】「全体に底流する」という設問の語句がヒント。ウ、エは部分的である。

(二) 評論文。「精神分裂病と脳のはたらき」に関する文章。

出典：計見一雄『脳と人間——大人のための精神病理学』。

(本文字数：約1800字＝昨年より約400字減少。設問数：7＝昨年と同じ)

問十	難	【空欄補充】bの「普通」は決まるが、ウとオとの判別は困難である。
問十一	標準	【語句の意味】辞書の意味から外れているものは正解にはならない。
問十二	やや難	【理由説明】本文の最後の2行で決まる。エは直後の5行に反する。
問十三	やや易	【空欄補充】前後の文脈から判断できる。
問十四	標準	【空欄補充】直前の一文の目的は何か考える。
問十五	標準	【空欄補充】傍線部2の一文前より。
問十六	やや易	【内容合致】本文の最後の2行から判断できる。

(三) 古文。出典：『大鏡』。

(本文字数：約 1000 字 = 昨年より約 100 字増加。設問数：7 = 昨年と同じ)

小問	難易度	コメント
問十七	やや易	【古文単語】2がやや難しいが、それ以外は基本。
問十八	標準	【文脈把握】傍線部の重要古語「けやけし」と「たまふ(下二段)」に着目する。
問十九	やや易	【修辞法】「射る」と「入る」は、入試頻出の掛詞。
問二十	標準	【文脈把握】Bの和歌の1行前を中心に考える。省略されている「帝(君)」を補えたかどうか。
問二十一	やや難	【文脈把握】「隠るへ」の意味から。前後の文脈だけでは判断しがたい。
問二十二	易	【文法問題】「に」の識別。完了の「ぬ」の連用形を選ぶ。
問二十三	易	【文学史】12行目「この侍問ふ」、21行目「かやう……するは」から、『大鏡』だと分かる。

〔総合コメント・今後の指針〕

昨年と比べて古文が難化したが、全体の難易度で見ると昨年並みといえる。

大問一は、四年連続で小説が出題された。昨年の二葉亭四迷に続いて、夏目漱石の作品からの出題。近代の作家の作品に読み慣れておきたい。設問は問四と問五がやや難しいが、容易な設問も多く高得点が望まれる。

大問二は、「精神分裂病の症状と脳の機能」についての評論文。本文は読みやすい。設問は問十が難問だが、それ以外の設問はそれほど難しくないので、高得点が望まれるであろう。本校では、夏期講習テキスト『早大現代文』の〔一〕などで、脳の機能についての評論文を取り上げた。

大問三の古文は、『大鏡』が出題された。昨年より難化したとはいえ、本学部の古文は、基本をきちんと身につけていれば確実に高得点が狙える。単語と文法を地道に覚えつつ、省略されている語句を補いながらじっくり読む、という練習を続ければよい。本校では、『早大古文 PART』の〔四〕などで、『大鏡』を扱った。会話形式の文体に慣れておきたい。